

## 要旨

### 占領地二世の「故郷」認識 —池田みち子の「上海二世」を通して—

蔡 夢慧

文芸雑誌『三田文学』の特派員だった池田みち子（1914-2008）は上海滞在の見聞を踏まえ、小説「上海」（1940）を皮切りとし、日本占領下にあった上海関連の作品群「上海もの」を1940年から1944年まで『三田文学』に続々と発表し、その作品群に1940年代の「国際都市」上海を生きる多元的な出自を持つ人々の生態を描きこんできた。しかし、その「上海もの」に関する研究はまだ少ない。本論では、先行研究の問題点を踏まえ、「上海二世」（1941）という小説を取り上げる。本稿は語り手「私」の眼差しに映った上海で生まれ育った日本人居留民第二世代の村山の生活ぶりに注目し、歴史的な資料を補助線としつつ、成長の地である上海を「故郷」とした日本宗主国二世の「故郷」認識のあり方と、西洋人と中国人という他者への視線で露呈した日本人意識の成因について考察する。

## Abstract

### Perceptions of “Home” Among Second-Generation Shanghai Occupiers: Through Michiko Ikeda’s *Shanghai Nissei*

Menghui CAI

Michiko Ikeda (1914-2008) was a correspondent for the literary magazine *Mita Bungaku*. Starting with the novel *Shanghai* (1940), based on her experiences in Shanghai from 1940 to 1944, she published a series of works in *Mita Bungaku* relating to Shanghai during the Japanese occupation. These works depicted the ecology of people of diverse origins living in the cosmopolitan city of Shanghai in the 1940s. However, studies on “Shanghai stuff” are still scarce. This paper examines the novel *Shanghai Nissei* in light of the issues raised by previous studies. Focusing on the life of Murayama, a second-generation Japanese resident born and raised in Shanghai, through the eyes of the narrator, “I”, and using historical sources as a support line, this paper examines the perception of “home” by those second-generation Japanese residents who made Shanghai, the place where they grew up, their “home”. At the same time, the genesis of Japanese consciousness exposed by their gaze at the Other; both Westerners and Chinese, will be examined.

# 占領地二世の「故郷」認識

## —池田みち子の「上海二世」を通して—

蔡 夢慧

### 1. はじめに

漢口攻略戦をきっかけに、池田みち子（1914-2008）<sup>1</sup>は文芸雑誌『三田文学』の特派員<sup>2</sup>として、1938年10月から3ヶ月かけて上海・南京・漢口を訪れ、そして1940年から41年にかけて再び上海に滞在した<sup>3</sup>。上海滞在の体験を踏まえ、池田は「上海」（第11回芥川賞候補作）を皮切りとし、十数篇の上海を舞台とした小説や随筆、いわゆる「上海もの」を『三田文学』に続々と発表した。特派員としては駆け出し的な存在であるが、「上海もの」を得意とした彼女の作品群は『三田文学』の和木清三郎編集時代の後半を彩った。その「上海もの」の世界に入ってみれば、「内地」から来た日本人女性の戦時上海での恋愛体験と、語り手「私」の目に鮮烈に映った日本占領下にあった1940年代初の「国際都市」<sup>4</sup>上海の混沌たる様相に加えて、「日支混血児」、日本人居留民第二世代、無国籍者の混血児など多面的な出自を持つ多様な存在者の複雑な生態を小説群の重要なモチーフとして確認できる。

本稿では池田みち子の「上海もの」に織り込まれた多様な「合いの子」の表象に焦点を当てるべく、短編小説「上海二世」<sup>5</sup>（『三田文学』1941年11月号）を取り上げる。「上海二世」は戦時上海に滞在した「内地人」の「私」の眼差しを通じて、上海で生まれ育った日本人二世のアイデンティティの揺らぎと上海日本人居留民社会内部の階層性を描いた小説である。小説において、「私」は窓越しにうす墨色の中に浮かぶ真珠のような街の灯を眺め、上海の彼方にある故郷の夜空を偲び、一年ぶりに帰る東京を思い巡らした。現地の日本人友人の村山はその晩に饞別の米を「私」のホテルに持ってきた。24歳の村山は「産湯まで支那の水を使った上海生えぬきの」日本人であり、一度岡山に「帰って」きたが、「内地」の秩序に耐えられず逃げ出すように上海に戻った。「私」は上海を「故郷」にして育った彼が中国人に近い暮らしをしているように思っていたが、ある日、虹口呉淞路にある村山の家を訪ねると、日本風の彼の住まいに意外な感じを覚えた。上海を発って東京に帰る際に、「私」は村山を誘い、共同租界にあるダンスホールへ連れていったが、共

同租界の中心地に足を踏み入れたことのない彼は日本人の優越性を声高に説き、西洋人の兵士と中国人を批判した。自分の尺度を人に当てはめすぎる村山に「私」はその場で彼との距離感を感じるのであった。

先行研究について、大橋毅彦は「上海居留邦人のありようが同列には論じられないものであること、そして〈会社派〉と〈土着派〉<sup>6</sup>のようにプリンシプルの上では互いの領域を侵さない関係にあるものとは違って、ここでは一方が他方の上に立ち、後者の生を脅かし踏みにじっていく構図があることを小説によって示し得た」<sup>7</sup>と指摘し、上海日本人居留民社会内部の相克を示唆した。大橋の論を参考にすることで、「内地」から上海にやってきた富裕層の「会社派」及び上海で一旗上げようとする「土着派」という順位の下位に置かれる〈上海二世〉の村山の一面が把握できよう。しかし、祖国の日本ではなく、成長の地である上海を「故郷」としつつ、西洋人と中国人に対面する時にことさら日本人としてのアイデンティティを高揚させる村山の自意識のあり様をいかに読み解くか、また彼にとって「故郷」が一体どういう意味を持つかは現段階ではほぼ注目されていない。よって、本稿では作品が書かれた1941年という時代背景を視野に入れ、小説に表象される日本人居留民第二世代のアイデンティティを考察することで、上海を「故郷」とした占領地二世の「故郷」認識を明らかにする。

## 2. 「故郷」としての上海

〈上海二世〉の村山は24歳の青年で、家族としては、母親と2歳年上の内河汽船に勤務する兄を持っている。ある日「私」は虹口にある村山の家を訪ね、村山の母親に会った。「住めば都で、慣れればここがいちばんよくなります。わたくし亡くなつた主人と十八の年にいつしよにきまして荒物屋をはじめましたが来年でもう三十年になります」と述べる村山の母親の言葉から、荒物屋を生業とする村山の両親、つまり一世は1912年に上海に渡航したと推測できる。上海日本人居留民社会の形成史を参照すると、1912年という年が上海日本人居留民社会形成の本格化する時期以降にあたるのがわかる。高綱博文が指摘したように、上海における日本人居留民社会の開始は日清戦争後であり、それが本格化するのには日露戦争後であった<sup>8</sup>。日露戦争によって、日本はヨーロッパの列強と同じような帝国を目指すようになり、大陸進出を始めた。この時期、日本の上海進出は紡績産業や石炭産業の発展に対応した輸出入貿易の拡大というだけでなく、各種雑貨などを取り扱う中小工業の広範な進出を伴っていた<sup>9</sup>。そうした好景気のうねりに乗じ、上海で夢を実現させ、一旗上げようとする日本人が増えてきた。日清戦争3年後の1899年には

上海日本人居留民数は1088人だったが、1905年には上海に居住する日本人総数は一躍4331名となり、上海租界を創始したイギリス人に次いで、上海在留外国人の中で第2位となっている<sup>10</sup>。1912年になると、上海在住日本人総数は7717人に増加した。さらに第一次世界大戦によって、欧米の中国貿易が大幅に縮小したことに乗じ、上海の日本人居留民社会は成熟期に向かった。日本の対中国貿易は激増し、上海は日中貿易の拠点となった。それに伴い日本人の数は激増し、1915年に11457人に増加し、イギリス人居留民を抜いて上海租界における条約国民中で首位を占めるようになった。「会社派」と呼ばれる一握りのエリート層、会社員・銀行員など給与生活者を中心とする中間層と、「土着派」と呼ばれる、虹口地域に定住する一般民衆から構成される上海日本人居留民社会が、ようやく成立したのである<sup>11</sup>。

「住めば都で、慣れればここがいちばんよくなります」と上海に永住する覚悟でこの地に根差すことを目指し、馴染もうとした一世の日本人に比べ、〈上海二世〉である村山は上海で生まれ育ったことにより、定住を運命づけられていた。両親とも日本人であり、虹口日本人街に居住しているため、出自からは「日本人」と見做される。一方、先行研究によれば、「国際的大都市に住む近代上海人は、外国からの移民と国内各地からの移民によって構成されており、いわば「五方薈萃、華洋雜処」（至る所から集まり、中国人も外国人も混在している）の状態であった。この意味で言えば、日本人居留民もかつては<sup>12</sup>「上海人」だった<sup>13</sup>。つまり移民都市とも呼ばれた近代上海の性格から、村山は「日本人」でありながら、〈外国籍の「上海人」〉とも言えるだろう。「産湯まで支那の水を使つた上海生えぬぎ」という境遇から、村山は母国日本の事情を知らなかったため、彼にとって寧ろ上海こそ言語や生活習慣、他者との関係性という中での最初の段階があった場所、謂わば「故郷」<sup>14</sup>とも言うべき原風景や景観があった場所であろう。

小説において、上海という「故郷」の本源的な影響力は村山の「内地」での体験によって、浮き彫りにされることになる。村山は子供のいない伯父の家を受け継ぐつもりで初めて日本に渡り岡山で一時期暮らしたが、24年間上海で生活を送ってきたため、日本社会の状況や習慣は彼には見知らぬことばかりである。とりわけ、お米も砂糖も切符制になっている戦時体制下の「内地」における国民生活は、「国際都市」上海とは状況が異なる。本来「ボーイから便所掃除までみんな日本人」という光景を目にした彼は驚愕し、「慣れるまで、お茶をもつてこいとかなんとかボーイに云う」のに「気がね」するなど、「日本人」であるはずの村山は「日本人ばかりつて随分不便ですね」と感じざるをえなかった。勤務先では、村山はボーイが日本語が分かることを忘れ、当直に当たった時に同僚に課長の悪口をこぼしたところが、後で告げ口されてしまった。会社の女事務員と映画を観て、夜遅くなって帰る

途中で巡査に「非常時」「非常時」と繰り返して諫められても、村山は一体どうして自分が叱責を受けたのか、心当たりがつかなかった。質屋で名前や住所を聞かれた時に、村山は自分が泥棒と決めつけられたと感じ、頬を引き攣らせて憤慨した。一方、自分が会社に忘れた万年筆を誰も盗まなかったことに、彼は日本人が間抜けだと感じる。

そうした日本との距離感を深く感じる村山のような「外地」生まれの二世の葛藤について、例えば『大陸新報』<sup>15</sup>では、「内地」に対して親近感が湧いてくるができないことを、太田佐平が指摘した文章「第二世の悩み？ 異国育ちの人々」（『大陸新報』1940（昭15）年7月22日付4面）が見られる。

異国で生れ□□□□つた私にとつて、内地の風物は、本当に身近なもの、親しいもの、懐しいものといふ感情が非常に稀薄になつてゐる事を自覚して空しく感じる。内地に住む一定の家が無い事もあるいは其のような気持にする条件か、などとも思つたりするが、両親の故郷の土に対してもそれ程の温かい感触と親しみを感じ取ることが出来ない。（本文から抜粋した。判読不可能の字は□で表す）

記事内容によると、執筆者の太田佐平は、中国で生まれ、幼少時代に中国人のみ住むフランス租界の一角で過ごした日本人である。彼は後ほど銀座で就職したが、生まれ故郷で培われた「季節の味覚」によって、千疋屋の食べ物より幼少期に汚い物売りから受け取った季節の味に対する憧れと感激がより印象的で、記憶から消え難いことを自白し、自分と「内地」との間の乖離感に悩まされることを指摘した。そういう自分の体験を踏まえ、太田は異国生まれの日本人の「内地」の事物及び祖国に対する感じ方が薄らいでいくことに心配を表し、「大自然の厳たる法則」<sup>16</sup>の前に、日本臣民、また大和民族である第二世及びその子孫の日本に対する感じ方の亀裂を如何に補うべきかという疑問を呈した。

小説において、その「大自然の厳たる法則」がもたらした「悩み」は村山にもあった。既に述べたように、村山は伯父の家を継承するつもりで「内地」で暮らし始めたが、「国際都市」上海で培われた認識が働いたため、彼は「日本人」でありながら、新しい生活の場に親近感を抱けず、祖国との絆を結ぶこともできなかった。そこで「故郷」としての上海は如何に村山の心理的な葛藤形成に影響を与えたのだろうか。以下では喜納育江の「故郷」の影響力に関する論考を参考にして、日本に違和感を覚える村山の屈折した認識について考察を行う。

「故郷」の風景とその記憶など、たとえそこを離れたとしても、「故郷」が、時には生涯に渡る様々な形で人間の「場所<sup>17</sup>の感覚」を左右するのはなぜだろうか。たとえ生まれ育った場所でない新しい場所で、新しく物語を積み重ねていき、その新しい場所との絆を深めたとしても、なお原風景としての「故郷」は人間の、特に「私」という主体の感情的経験にとって特別な意味をもつ場所として認識される<sup>18</sup>。

喜納育江の指摘によれば、人生の原点としての「故郷」は人間の「場所の感覚」に影響を及ぼす特別な場所である。そしてその「故郷」が人間の「場所の感覚」に与える影響力は一時的なものではなく、新しい生活環境で暮しても、「故郷」で形成された自己認識がより長い時期に渡って保たれる。喜納の観点を参照して考察すると、村山は上海で生まれ成長したため、時間軸、空間軸で「真の故郷」日本との繋がりが途絶え、移住先に住む年月が長ければ長いほど生まれついた現地の習慣、社会のルールに馴染んできた。祖国より寧ろ生まれ故郷である上海での体験や暮らし方、社会的風土のほうは人生の原風景として、彼に親しまれ、自己認識の確立のプロセスにおいて「故郷」として強い影響力を発揮してきたと言える。それゆえ、村山が日本での生活に違和感を覚えたのは、「国際都市」上海という人生の原点で形成された認識が「内地」で通用せず、その認識を持つ彼には上海と日本の風土との差異ゆえに安堵感が湧いてくることができないからだと言えよう。「故郷」としての上海で育んできた自己認識の影響を受け、村山は本国内で帰属感を覚えることもできず、「水も漏らさぬ日本の秩序」に耐えられず、「内地」に3ヶ月居たぎりで生まれ故郷の上海に回帰した。

### 3. 「故郷」を生きるアンビバレンス

小説の語り手「私」は去年(1940)の初夏に東京から上海港に辿り着いた日本人で、上海で暫く逗留するつもりだったが、いつの間にか上海で1年間を送っていた。紹介状を書いてくれた軍部や新聞関係など相当な地位についている「ひとかど」の人々の「支那観」に嫌気がさした「私」は、旅行者気分で自分の好奇心のままに、ユダヤ人街や中国人街を転々として過ごし、ジブシーの家族と隣り合って暮らしたこともある。また滞在中、上海日本人居留民地域に住まないことを決め、数える位しか日本料理を食べなかったし、住居を変える都度、言語的な障壁を越え、国籍が違う人々と友達にもなった。東京に帰る直前でも、「私」は共同租界のホテルに泊まる。が、自身の頼りない英語では言語の壁に阻まれ、上海を歩き回った「私」は、通りすが

りの友情しか結べなかった。それ故、「私」は、知り合いの中で齟齬なく意思疎通ができる村山を友達として大切にしている。小説において、「私」が村山と知り合ったのは上海へ行く船の中であった。二度目の上海行きで赤土色に染まってくる海の水に郷愁を覚える「私」（池田みち子を彷彿させる人物）に対して、ちょうど岡山から戻ってきた村山は「内地はどれも住みにくいですね」と嘆き、日本での不快な体験を叙述した。「内地」から上海へ逃げ出したという彼の話ぶりから、「私」は上海を「故郷」にして育った彼が上海地元の中国人に近い暮らしをしている日本人の典型だと推測していたが、虹口呉淞路の呉服屋の横丁に位置する村山の家を訪れたとき、「私」は自分の想像の間違いに気づいた。

村山の住む虹口呉淞路は上海日本人居留民「土着派」の集中居住地であり、上海で最も特色のある日本人商店街でもあった。日本堂書店、至誠堂書店、石橋洋服店、浜田商店など多くの歴史ある老舗が軒を連ねたこの街は、中国の建築家・林徽因によって、その「日本的雰囲気濃厚さ」は霞飛路のロシア的雰囲気にはるかにまさと評されている<sup>19</sup>。「私」は村山の住む街に入ると、上海日本人居留民の日常生活の様子が目に映った。「緋の丸帯や立縞の明石の並んだ飾窓」、「カーキー色の国民服と赤い博多帯がでてきた。女は紫羽二重の大きな風呂敷包みをさげて、藤表の駒下駄をカラコロ歩く」、「日本流につくられた便所」、「とりつけた木口の新しい日本風の流元」。また村山の屋内を見ると、典型的な日本風の装飾品が発見できた。「なかは畳敷きで、廊下よりも畳の厚さだけ高くなつてゐる。部屋の大きさが畳の寸法に合はないので、六畳敷いた畳の片側には特別につくらせた帯のやうな細い畳がはめこんでゐる」、「隣りの部屋へつづくドアから少し離れたペンキ壁には、天井の方に五寸釘をうちつけて、七草を描いた軸物がかけてある、そのしたには、小さな置床がとりつけてあつた。造花の薔薇が二輪さしてある青い硝子瓶とならんで」。しかしながら、その典型的な日本風の装飾品が、純粹に日本的な背景の中に置かれていない点から、村山家の屈折した形での日本へのこだわりを「私」は読み取った。こうした村山の屋内の細部から、「私」は中国人の家屋に無理やり日本的な要素を折衷的に取り入れようとする不自然さが窺えた。

一方、村山の娯楽活動も「日本」を中心に展開された。「国際都市」上海で生まれ育ったにもかかわらず、村山は旧フランス租界の大通りである霞飛路アベニュー・ジョッフルをまだ知らず、旧フランス租界の豪勢な邸宅街に足を踏み入れたこともなかった。「大陸興行に内地から渡つてくるレコード会社の流行歌手や映画俳優の実演しかみたことのない」村山は、短期滞在者の「私」に比べても「国際都市」上海の体験を持たず、生活面において「畳」が象徴する日本の枠組みから離れていなかったのである。そして上海で生活する上で必要な中国語能力については、以下のように記される。「彼の支

那語は発音がよいので支那人からほめられるけど、日本育ちの私の耳では、ほかの日本人の支那語とくらべてさういふ区別はわからない。実際、彼の支那語は発音だけが取柄で、文字は読めないのだし、二年間支那語学校に通つただけの人に比べても、知つてゐる言葉の数は多くなかつた、「幼いときから支那語を耳にしたせいで支那人とそっくりのその発音こそ彼の強味なのだ」。このように、村山の中国人と変わらぬ中国語の発音という強みは上海で生まれ育つたおかげであるが、文章力や語彙力の点で彼の中国語能力は決して高くないとされている。彼の現地語の運用能力は知的な読解どころか、日常レベルでも満足な中国語の運用ができない程度なのである。「支那を故郷にして育つ日本人の典型」のイメージから外れたそうした村山の生き方について、「私」は以下のように考えている。「村山の子供の、またその子供の頃になつても、やつぱりその子供は支那のどこかで、どてらを着こんで畳に座り、刺身や奈良漬を食べてゐるだらう。が、それは、支那人から自分を区別したいと願ふ過剰な意識からではなく、親から子へ、子から孫へと血とともに伝はる習慣なのだ。その習慣のなかで土地の風習と摩擦する部分は、年月のなかで消化されてしまふだらう」。つまり上海で成長する日本人には、「祖国の習わし」は、血縁の継承とともに、親から受け継がれ、生活の形態として、習慣として伝えられるのが基本であったことを思わせる。また上海の風土と祖国の慣習とのずれは時間と共に折衷する形で、「日本」の中に融合していこう。

成田龍一は「歴史」（過去の時間）・「風景」（空間）・「言語」（感情）を同じくするというを故郷の重要なポイントと見なし、「それらを共有することにより、同じ故郷をもつということが確認されていく」、「即ち、同じ時間を過ごし、同じ空間を見、同じ言葉で話し、同じ感情をもつという意識が強調され、そのことこそが故郷なのだ」と指摘している。成田の故郷論に当てはめていくと、村山は自己認識の形成における最初の間であった上海で成長してきたが、虹口に居住し、日本風のライフスタイルを保持する彼は、日常生活においては日本流儀を押し通し、上海の中国社会に溶け込もうという気持ちは全く持っていない。また「感情」を表すツールとしての言語について、村山は中国語の確かな発音が強みだが、彼の知っている言葉の数が少ないため、生まれ故郷＝「国際都市」上海の現地の歴史、情報と状況を上海地元の人々と語り合い、確認することも難しい。よって、村山は自分とその謂わゆる「故郷」との絆を実際に結成することが出来ないと言えるだろう。このようにして「私」の眼差しを通して、上海と「日本」を同時に生きながら、また同時に双方を知らない、またはどちらにも属さない（上海二世）の村山のアンビバレントな有り様が映し出されているのである。

総じてみると、上海で生まれ育つた故、祖国日本との繋がりが途絶えた村山にとつ



て、上海は生まれ故郷であり、自己意識形成上における最初の間である「故郷」の役割を果たす。そして「内地」での見聞により、日本への憧れが打ち砕かれたため、彼は上海への「愛着」を更に募らせ、上海を「安住の地」と見なしたと考える。しかし、居住環境と生活面において、「日本租界」と俗称される虹口に住み着き、そして中国人の家屋を改造した「畳」・「七草」・「造花」に代表される日本の空間の中を生きる村山は、屈折した形で日本式の生活様式にこだわっている。中国語の運用もできない彼は「故郷」の上海と絆を結べないので、結局上海全体の風土に馴染まず「日本」を中心に暮らしている。以上の分析を踏まえてみれば、〈上海二世〉の村山にとって、「故郷」は重層的な意味を持っている。即ち、「故郷」は「生まれ故郷」と、「民族的な出自」、「事後的に発見される安住できる場所」という三つの概念を内包すると推測できるだろう。そして、この三つの「故郷」の相互影響または相互浸透によって、村山のアンビバレントな有り様は析出できるだろう。その上海を「故郷」にした村山の「故郷」認識は、寧ろ「民族的な出自」への共同性を見出せなかったため、彼が能動的に「生まれ故郷」を「安住できる場所」として想定した上で生まれたものであろう。

#### 4. 他者への視線で露呈した日本人意識

東京に帰る前の夜、「私」は村山と沢山の約束を思い出した。知識上も見聞の上でも「日本」の枠組みに縛られる村山のことを、「私」は厳しい目で見つめた。彼に自分の生き方へ反省を促させるため、「私」は以前、村山を日本人だけを目標に公開されない音楽会や日本人の姿があまり見られない瀟洒な商店街などに案内しようとしたが、その約束が果たされないまま終わると考え、村山を共同租界のダンスホール<sup>20</sup>へ連れて行った。ダンスホールで村山はイタリアの憲兵が居るのに驚愕し、ゲートル姿のイタリアとアメリカの兵隊が一緒になって酒を呷るのを見ると、彼はいつに似ず多弁になった。

「外人の兵隊は、僕、駄目なやうな気がするね、そりゃ勿論、ダンスをするのがどうのこうのと云ふわけじゃないんですが、日本人の持つてゐる一途なものを、まるで持つてゐないやうに思はれますね。宣戦は布告されてゐないと云つてもアメリカは兎に角敵にまわつてゐる国なんでせう、それと仲よくいつしよに呑んだり踊つたりして、日本の兵隊なら相手がたの兵隊とかりにもテーブルを並べて笑ひあふやうなだらしないまねはしないと申しますね、」（上海二世）、100頁）

ここで「日本人の持っている一途なもの」は「愛国心」と読み解くことができる。「上海二世」の作品世界の時間設定は1941年の初春で、既に第二次世界大戦はますます世界中に拡大していく時期に当たる。世界中の情報を受容できる「国際都市」上海において、その戦争の険しい空気はさらに鋭く嗅ぎ取られる。小説では、「それまで上海へ入荷してゐた印度炭が欧州戦争以来船舶不足で来なくなつてゐたので、三日おきに買ひにやるその度に石炭の値段があがつてゐる」、「ハル国務長官が獨伊船舶抑留を通告したのは一週間前であつた。そしていまヨーロッパでは、イタリヤ本国兵はギリシャに進軍したまま悪戦をつづけてゐた。上海の英字新聞ではその遅々としてはかどらないギリシャ戦線の部分的なイタリヤの退却をひろつて宣伝につとめてゐる」とあるように、池田みち子は第二次世界大戦の欧州での開戦以降の石炭価格の変化と、上海の新聞が伝える国際情勢を通して、1941年に戦争が上海でもたらす影響をリアルに伝えた。こうした厳しい時局の中で、村山は「ゲートル」姿でダンスを踊る兵士や、敵国の兵士と同じテーブルに座って平気で酒を飲みあう兵士たちを「だらしない」、「愛国心のない奴」と批判したのである。

しかし「私」は、戦争に神経を尖らせる日本人に対して、西洋人の兵士のそうした「だらしない」振る舞いを寧ろ、「国際都市」上海で平和な生活に安んじる一つの選択であると捉え、西洋人の兵士を許容した。それに対し、日本に属する一員としての集約的な自意識を覚醒させる村山に、「私」は相手と日本人との「民族の氣質」の相違を見きわめた後で、相手の行動を論じるべきだと異議を申し立てた。自分の話が村山を非難したよう響いたことに気がついた後、「私」は彼を踊り場に誘ったが、ダンスホールで村山はわざと「アメリカマリン」（アメリカ海兵隊の兵士）の肩や白系ロシア人ダンサーの背に何度もぶつかった。そのような攻撃的な村山と対峙し、「私」は中国の猫の飼い方を引き合いにして、「首輪をかけたり、鈴をつけたりする」日本人の猫の飼い方と「ただ御飯をたべさせ、抱いたり撫ぜたりしない」中国の飼い方との違いを指摘し、村山の反省を促した。しかし、村山はその理由を「日本人の女はみんな針がもてますけど、支那人はもてないのが多いのですよ、アマなんかでも、まともに雑布の縫へるの少ないんですからね、だから首輪なんか支那人につれないですよ」と猫の飼い方も日本人が一般的に優れているからだという説を唱えて、民族的優越感をあらわにした。その村山の中国及び中華民族への探究心を持っていない姿勢に気づいた結果、「私」は彼を敬遠するようになった。

以上で述べたように、日本に親近感を感じられずに村山は上海に戻ってきたが、上海において、他者としての欧米人や中国人に向ける視線に、「日本」という影はかえって明らかに存在している。上海に「愛着」を覚える村山はなぜ「日本」を参照軸にして、日本人の優越性を強調するのだろうか。次では上海日本人居留民社会

内部の階層性と、1940年代の上海における日本人占領者の身分に注目して分析する。

陳祖恩によると、上海日本人居留民はその職業や地位の違いによって「会社派」と「土着派」に分類される。「会社派」は一般に共同租界かフランス租界、あるいは他的高级住宅地に住む、日本人居留民の中でも上層部の人たちで、例えば商社や銀行の支店長、高級官吏、大企業の経営者や幹部社員などを指す。一方「土着派」とは虹口、閘北、楊樹浦等に住んで中小企業、商店、飲食店や旅館その他の職業を営む大多数の日本人を指し、彼らは居留民社会の中下層に属していた<sup>21</sup>。若くして上海に移住し、荒物屋を生業とした「土着派」の両親の子供として、村山は日本人居留民社会では裕福な生活に恵まれていないと推測できる。「彼の会社では、内地から雇った人には海外手当を出すので自分たちよりも割がよいのだ」とあるように、同じく日本人と言っても、現地で生まれた村山に比べて、会社内の転勤として日本から上海にやってくる「内地」の社員だけに特別手当が付与され、高い給与が支給される。そして「月給日の晩だけのために、あとの三十日を働いてみます（中略）ほんの五時間を思ひ存分にあそぶために、一ヶ月も宮々と過ごす人の荒みが痛々しいもの」と記されるように、村山の生活が決して余裕を持っていないということは窺える。池田みち子が「上海二世」の2年後に書いた小説「一ドルの話」（『三田文学』1943年5月号）に村山も登場し、本作の補完作品として彼の生活状態が詳しく描かれている。

それは半年も前であつた。社長の秘書の村山がまだ私と机を並べて総務室にゐた頃である。彼はほかの独身の男たちと同じやうに、月々の給料も、前借に前借を重ねて身動きできなくなつてゐた。煙草の金も不自由になると、それが五日前に前借りしたばかりでは今更会計に泣きついてみてもらちのあきやうもないので、仕方なく腕時計をはづす、外套はぬぐといふ風で、果てには、明日の朝までの煙草を恵んでくれと云つて、半分残つたピークインを私から横取りしてかえるところまでくる。陳東喆（T通信社の総務室のボーイで、村山より階級の低い中国人の配達夫。引用者注）がさういふ村山へポンと五十圓借したのである。（中略）それから、彼は屢々陳から金を借りるやうになつた。（下線は引用者による。「一ドルの話」、25-26頁）

月々の給料だけで生計を立てられない村山は日常の生活費を捻出するため、外套や腕時計などの身の回り品を質に入れ、自分より地位が低い中国人の配達夫に高い利子を払い借金しなければならなかった。身動きできないほどの給料の前借りに加

えて、度重なる借金で、村山の生活は深刻な困窮状態に追い込まれたことが推測できる。そうした経済的格差を元に形作られた「内地／外地」、「会社派／土着派」、「強者／弱者」という秩序の下位に位置づけられる彼は、中国人の配達夫までに借金するという点からマイノリティ的な存在だと言わざるをえない。それゆえ、経済的無力の彼はフランス租界や共同租界の中心地に足を踏み入れることができず、閉鎖的に虹口の日本人街を中心とした生活しか送れないだろう。

一方、日清戦争以来の一連の戦争を経て、日本軍の中国に対する占領・支配は強化されつつあった。第二次上海事変（1937）以降、上海租界の外側（中華民国の支配地域）は日本軍に占領され、共同租界とフランス租界は、占領地に浮かぶ離れ小島＝「孤島」の状態に陥ってしまった<sup>22</sup>。そして1940年8月、イギリス軍主要部隊は上海から撤退し、同年10月には、自国の居留民に「残留する然るべき理由がない」場合は上海を離れるよう、勧告が行なわれた。日本と米英両国の関係は悪化の一途をたどり、結局イギリスに続いて、アメリカもまた上海からの戦略的撤退を決断した<sup>23</sup>。租界を創造したイギリスとアメリカの上海からの撤退と共に、日本軍は租界の支配者になっていく。西洋人と中国人から見れば、村山は日本帝国の一員すなわち政治的優位に立つ占領者であるが、「土着派」の息子でしかない村山は多くの「特権」を獲得したわけではない。高綱博文の考察によれば、朝鮮や満洲での極端な官尊民卑の日本植民地社会（軍人と官僚の天下）と異なり、圧倒的に民間人が多い上海日本人社会では、上海の日本人がそれなりにいい暮らしをしたといっても、同じ上海の英米人の暮らしと比較すると大きな差があった。例えば日本人居留民が集住した虹口地区と「河向こう」の旧イギリス租界・フランス租界の住宅街を比較すればその差は歴然としていた。とりわけ「土着派」と呼ばれた上海日本人民衆は、「国際都市」上海において新参者・周縁者であり、西洋文明に対する劣等感・孤独感・疎外感（被害者意識）を強く抱いており、日露戦争後の日本帝国「一等国」・「軍事大国」という体面と自分たちの現状のギャップに強いフラストレーションを抱いていた<sup>24</sup>。高綱の指摘を踏まえ、上海日本人社会の特徴と、「土着派」である日本人居留民の欧米人に対する劣等感を把握できたが、本作の〈上海二世〉の村山の西洋人兵士と中国人への視線には、日本植民者にありがちの自己認識を露呈したと見られる。つまり日本民族の優位性を高揚することで、他者を排斥し、自分が占領者としての正当性を唱えることである。が、その「日本人意識」には一種の矛盾が内包されている。それは、経済的な貧困のため、自力で容易に上海に定着し得ない村山が上海で「生存の場」を確保するために、上海日本人社会におけるマイノリティという立場を糊塗するかのように見えるからである。

## 5. おわりに

本稿は池田みち子の上海体験を考察した上で、その小説「上海二世」を取り上げ、池田みち子の目に映った、上海で生まれ育った日本人居留民二世世代のアイデンティティのあり方及びその「故郷」認識を検討した。まず占領地上海で生まれ育った村山の「故郷」認識には「出身地」と、「民族的な出自」、「事後的に発見される安住できる場所」という三つの故郷の概念が内包されている。「内地」での体験に安堵感を覚えず、上海を「故郷」とした彼の「故郷」再認識は「上海から日本へ」という空間的な移動に伴って創出された事後的なものである。一方他者、即ち西洋人と中国人に対面して、上海日本人居留民社会におけるヒエラルキーの下位に置かれる彼は「日本」を心の拠り所にして、日本民族の優越感を高揚させることを通して、帝国日本の一員に属するという意識を形成し、自分の劣等感を払拭することに努めた。その「故郷」認識と「日本人意識」は相互に孤立して存在するものではなく、寧ろ「生存の場」を確保する上で融合しあうところもあるだろう。そうした村山のような〈上海二世〉の有り様は池田みち子が上海で発見した、一枚岩にされがちな占領者のイメージに隠蔽された上海日本人居留民社会の複雑な性格の側面と言える。〈上海二世〉のような人物像は、まさに池田みち子が表象した多言語が飛び交い、多人種の坩堝である戦時中の「国際都市」上海の側面でもあろう。しかし本稿では「故郷」に対する説明・解釈及び〈上海二世〉の抱えていた葛藤を生み出す背景への考察にはまだ不十分なところがあるため、今後「故郷」という概念について考察を進めつつ、池田みち子の「上海もの」に描き出された日本占領下の上海における日本人の生態をより詳しく掘り下げようとする。

## 注

- 1 高野義夫発行『昭和人名辞書II:第1巻 [東京篇]』（日本図書センター、1993年、70頁）、薮際子『日本女性文学大事典』（日本図書センター、2006年、18頁）と「作家池田みち子死去」（『赤旗』2008年1月9号、15頁）を参照。
- 2 池田みち子「上海の“文なし婦人記者”」『週刊読売』1957年8月18号、80頁。
- 3 特派員として中国滞在の時期は現地報告「漢口へ続く揚子江」（『三田文学』1939年1・2月号）と「支那旅行の拾ひもの」（『改造』1939年2月号）に沿って確認した。第二次上海行の滞在期間は1940年～44年の「三田文学」で発表された「上海もの」と戦後で上海東南日報主筆宋越倫、参議院議員浅岡信夫、中国研究家村上知行との座談会「あの土地 あの人 その後の大陸・座談会」（『サロン』10月号、1949年、79頁）を参考にし

て確認した。

- 4 「華洋雑居」の近代上海には40数カ国の外国人が生活しているが、上海の国際的な都市空間を反映するのは主に西洋列強の植民地に近い租界であるので、本稿では括弧付きの「国際都市」を用いる。
- 5 本稿では、「上海二世」は1941年11月に『三田文学』で発表された短編小説を指すのに対し、〈上海二世〉は作品に登場する戦時上海で生まれ育った日本人居留民第二世代を表す。
- 6 「会社派」とは、一般に英仏租界や虹口の高級住宅地に住んでいる大手企業の重役、銀行の支店長、高級官僚、高給サラリーマンなどで構成される。会社派に属する人は、上海における西洋の富豪たちと同じように、洋館、芝居、テニスコート、プールもある庭付きの邸宅に暮らしていた。日本の大企業の重役や大手銀行支店長らの送別会は何週間にもわたり、ほぼ毎日のように宴会が開催されていた。彼らは会社の運営方針と任期があるため、上海との関係も一時的なものに過ぎず、上海に骨を埋める等考えもしなかった。一方、「土着派」は中小企業、商店、飲食店、旅館その他の業種に従事する中下層の人たちで構成される。彼らは家族と共に故郷を捨て、上海で一旗揚げて永住する覚悟でいた。自力で生活を営む土着派は、雑貨屋や飲食店などといった利の薄い零細商店を営んだ。彼らは何れも子供や年寄を連れて来ており、家庭の負担が重く、また中国民衆の日貨排斥運動が起きると、真っ先に生存の危機に立たされるようになって、そこで彼らは、普段の鬱積した不満を中国民衆に向け、日本軍の手先へと転じるようになるのである。陳祖恩著・袁雅瓊訳・森平崇文監訳『上海の日本文化地図』、上海錦綉文章出版社、2010年、20-22頁。
- 7 大橋毅彦『昭和文学の上海体験』、勉誠出版、2017年、215頁。
- 8 高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』、研文出版、2009年、30-32頁。
- 9 山村睦夫「戦前期上海における日本人居留民社会と排外主義 1916～1942（上）—『支那在留邦人人名録』の分析を通じて—」『和光経済』47巻2号、2015年1月、2頁。
- 10 榎本泰子『上海—多国籍都市の百年』、中央公論新社、2009年、148頁。
- 11 高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』、研文出版、2009年、30-33頁。
- 12 ここでの「かつては」は「1868年から1945年まで」という範囲を指す。
- 13 陳祖恩著・石川照子訳『上海に生きた日本人—幕末から敗戦まで』、大修館書店、2010年、xi頁。
- 14 この「故郷」の概念は喜納育江の解釈を参照した。喜納育江は『〈故郷〉のトポロジー—場所と居場所の環境文学論』で「故郷」について、「言語や文化など、人間が他者との関係の中で自己意識という意味でのアイデンティティを形成するうえで、最も初期の段階があった場所であり、原郷とも言うべき原風景や景観があった場所としておく。人間にとって心理的・物理的な原風景であり、環境との原初的関わりの起点となる」と説明し

ている。

喜納育江『〈故郷〉のトポロジー—場所と居場所の環境文学論』、水生社、2011年、20-21頁。

- 15 1939年1月1日、対日協力政権であった中華民国維新政府下にあった上海で、大陸新報社から刊行された日刊新聞である。その後、1940年3月末に成立した汪精衛（汪兆銘）政権下で発行が継続され、終戦後の1945年9月10日まで続いた。華中を中心とした日本占領下の中国の政治、経済、戦況、時事、さらに文学・文化・芸術の動向、社会事情などを知る上で大変貴重な資料である。「中支唯一の国策新聞」とも呼ばれた。  
『大陸新報』解題 <http://shanghai-yanjiu1.sakura.ne.jp/mysite2/>
- 16 記事で太田佐平は異国育ちの日本人二世の「悩み」を「土に対する恐れ」といふ大自然の厳たる法則」に困むと指摘した。  
太田佐平「二世の悩み？異国育ちの人々」『大陸新報』、1940年7月22日、4面。  
<http://shanghai-yanjiu1.sakura.ne.jp/mysite2/>
- 17 喜納育江の提示する「場所」(place)の意味合いについて説明すると、空間(space)と区別する用語で、「場所」は、人間の日常性と密接に関連する言葉であり、「空間」に包含されるものである。しかし、同時に、「場所」は「空間」とは異なり、人間の定住する生活を暗示し、そのような生活の蓄積の中から歴史が創造される。さらに「場所」においては、アイデンティティが形成され、帰属感や職業が獲得される。それはただ人間が通過していくだけのスペースではなく、生活を重ねる中で記憶が蓄積され、未来が方向づけられる領域でもある。これに対して、「空間」は、地理的な概念として遠くから眺望され、人間が土地または人間を取り巻く物理的な環境と接触する際の具体的な皮膚感覚が希薄な領域である。」  
喜納育江『〈故郷〉のトポロジー—場所と居場所の環境文学論』、水生社、2011年、18-19頁。
- 18 同上、25頁。
- 19 陳祖恩著・石川照子ら訳『上海に生きた日本人—幕末から敗戦まで』、大修館書店、2010年、116-117頁。
- 20 大橋の考察によると、ここはライシャム・シアターである。中国名は蘭心大戲院で、ロンドンの伝統ある劇場を手本に建設された近代上海の代表的な劇場である。  
大橋毅彦『昭和文学の上海体験』、勉誠出版、2017年、209頁。
- 21 陳祖恩著・石川照子ら訳『上海に生きた日本人—幕末から敗戦まで』、大修館書店、2010年、116頁。
- 22 榎本泰子『上海—多国籍都市の百年』、中央公論新社、2009年、13頁。
- 23 同上、65-66頁。
- 24 高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』、研文出版、2009年、19-22頁。

## 参考文献

- 池田みち子「上海二世」『三田文学』1941年11月。
- 池田みち子「一ドルの話」『三田文学』1943年5月。
- 池田みち子「上海の“文なし婦人記者”」『週刊読売』1957年8月18号、80頁。
- 榎本泰子『上海—多国籍都市の百年』、中央公論新社、2009年。
- 大橋毅彦『昭和文学の上海体験』、勉誠出版、2017年。
- 喜納育江『〈故郷〉のトポロジー—場所と居場所の環境文学論』、水生社、2011年。
- 高網博文『「国際都市」上海のなかの日本人』、研文出版、2009年。
- 陳祖恩著・石川照子ら訳『上海に生きた日本人—幕末から敗戦まで』、大修館書店、2010年。
- 陳祖恩著・袁雅瓊訳・森平崇文監訳『上海の日本文化地図』、上海錦綉文章出版社、2010年。
- 成田龍一『故郷の喪失と再生』、青弓社、2000年。
- 山村睦夫「戦前期上海における日本人居留民社会と排外主義 1916～1942（上）—『支那在留邦人名録』の分析を通じて—」『和光経済』47巻2号、2015年1月、2頁。